

ジャンルを超えた共通性（5） —デフォー作品における政治・歴史・文学—

干 井 洋 一

本稿を含む一連の論考では、政治小冊子と長編小説という異なるジャンルを対象に、デフォーが設定した語り手の独自性、アイロニーの技法、歴史的事例の用い方という3つの特徴に着目しつつ、デフォー作品がもつ共通点について考察する。前稿に引き続き、『ハノーヴァー家の王位継承に反対する理由』(*Reasons against the Succession of the House of Hanover, 1713*)を取り上げる(ハノーファーではなく英語名ハノーヴァーを用いる)¹⁾。本稿では、先行研究を検討した後、語り手の独自性という観点から作品分析を行なう。

I

上述した問題を考察していくに当たり、まずは『ハノーヴァー家の王位継承に反対する理由』(以下では『王位継承に反対する理由』と略する)の構成を以下に示す。

- (a) 冒頭部分
- (b) ハノーヴァー家の王位継承に反対であると述べる箇所
- (c) ジェーン・グレイに関する史実を導入する箇所
- (d) 絶対王政への忠誠を取り上げた箇所
- (e) 王位継承に反対する理由としてフランスの脅威を挙げる箇所
[本稿では以下を後半部とする]
- (f) 英国を病人に喩える箇所
- (g) ロバート・スペンサーに関する史実を導入する箇所
- (h) リチャード2世に関する史実を導入する箇所

(i) 僭王ジェームズに王位継承資格がないと断言する箇所

(j) 結論部分

次に、作者デフォーが『王位継承に反対する理由』において、読者に伝えようとした内容を確認しておきたい。王位継承問題に関するデフォーの持論は以下の3つにまとめることができる。

1. 英国民は1701年の王位継承法を遵守すべきであり、アン女王の跡は、新教徒であるハノーヴァー選帝侯ジョージが継ぐべきである（カトリックを奉ずる僭王ジェームズの王位継承に反対）。
2. 名誉革命こそ英国の礎を成すものであり、議会によって承認されたウィリアム3世の治世こそ、英国が断固として守り抜き、継承していくべきものである（血統だけを重視したスチュアート王家による王位継承は否定すべきであり、またルイ14世が体現する絶対王政は否定すべき）。
3. カトリック国フランスの力は殺ぐべきであり、その意味でもルイ14世の庇護下にある僭主ジェームズが次期国王となることは許されるべきではない（議会を尊重するという英国における現行の政治体制を維持すべき）。

II

『王位継承に反対する理由』に取り組んだデフォー研究者の主たる関心事は、本作品で用いられているアイロニーに関するものであった。例えば、大部な『ダニエル・デフォー伝』を著したバックシャイダーは、デフォーの『非国教徒捷徑』(*The Shortest Way with Dissenters*)と『王位継承に反対する理由』とを比較しつつ、本作品においては『非国教徒捷徑』とは異なり、デフォーは批判対象である人物の言葉遣いを真似ようとはしていないと述べつつ、本作品におけるアイロニーは誰の眼にも明らかだと断じている。僭主ジェームズが王位に就いたら「彼は英国民に絶対君主への隷属を教えることになり、また厄介な存在である議会を無くすことで、英国に安寧をもたらすことになる²⁾」と語り手が揶揄している箇所を、バックシャイダーは取り上げ、「デフォーは悪

意のこもった当てこすりに近い形で、露骨なアイロニーを用いている³⁾と述べている。両作品におけるアイロニーの矛先はそれぞれ異なっており、『非国教徒捷徑』における批判対象は国教会強硬派であり、『王位継承に反対する理由』の批判対象はジェームズ支持派である。

同様に、デフォー研究の碩学ノヴァクも、『王位継承に反対する理由』においてアイロニーが用いられていることは明らかだという立場をとっている。ノヴァクは『ダニエル・デフォー：フィクションの泰斗』の中で、本作品は「僭主ジェームズを擁護するジャコバイト派が唱えている主張の愚かさを暴露するとともに、その愚かさを更に嵩じさせるような、馬鹿馬鹿しい主張を語り手が繰り返し唱えるという仕組みを通して、僭主擁護派を手酷く嘲笑している⁴⁾と述べている。

しかしながら、バックシャイダーやノヴァクは本作品を論じてはいるものの、それらは短評に過ぎず、本作品を詳しく論じている研究者は僅かであり、例外的存在としてサザランドとリシェッティの二人を挙げることができる⁵⁾。他の先行研究においては、『王位継承に反対する理由』がアイロニーを用いていることについて、簡単に触れているだけであり、（1）作中のどの箇所でアイロニーが明確になっているかという問題や、（2）作中のアイロニーが首尾一貫しているか否かという問題については、十分な検討がなされているとは言い難い。以下では、上述した2つの問題を扱っている先行研究として、サザランドとリシェッティの論評について纏めてみよう。

作品タイトルが『ハノーヴァー家の王位継承に反対する理由』であることから、この政治小冊子を手にとった読者は、アン女王の異母弟であるジェームズ（つまりフランスの後ろ盾を得ているカトリックの僭王）を支持する人物が、本作品の語り手であると考えただろう。だが実際には、プロテスタントである選帝侯ジョージを支持する人物を、デフォーは本作品の語り手として設定している。そのため、語り手がジェームズ支持派ではなく、ジョージ支持派であることに戸惑うというプロセスを、冒頭近くで（具体的には（b）の箇所）で、

読者は経験することになる。その後、選帝侯ジョージを支持する語り手から、なぜジョージを英国王として迎えることに反対なのかという理由を幾つも聞かされた読者は、それらの理由が余りに荒唐無稽なため、語り手の主張を文字通りに受け取ることにはできないことがわかる。作品をある程度読み進めることで、読者は、語り手が本当に言いたいことは彼が作中で展開している主張とは全く逆であり、本作品にはアイロニーが用いられていることに気づくという仕組みになっているのである。

本作品でアイロニーが駆使されているという点において、デフォー研究者の見解は一致しているが、(1) アイロニーがどの箇所で起きているのかという問題や、(2) アイロニーが首尾一貫しているか否かという問題については議論が分かれている。まず第1に、どの箇所でアイロニーが明確になっているのかという問題について取り上げる。サザランドは、英国が罹っている病を治すために一時的に僭王ジェームズを受け入れるしかないと主張する(f)の箇所が決定的な箇所であると考えており、一方、リシュッティは一つ前に位置する(d)の箇所、つまり英国が辿るべきはフランス流の絶対王政であり、プロテスタントは正統な王ジェームズに抗うことなく、死を選ぶしかないであろうと主張する箇所で、読者は本作品に盛り込まれたアイロニーにはっきりと気づくことになる⁶⁾。そして筆者は前稿において、(c)の箇所(ジェーン・グレイの史実を導入した箇所)でアイロニーが既に明確になっていることを論じた⁷⁾。

第2に、本作品においてアイロニーが首尾一貫しているか否かという問題について考えてみよう。まず、サザランドは、デフォーはアイロニーの扱いが巧みであったとはいえないと判断しており、彼の見解によれば、デフォーの主張は「一貫してアイロニカルとはいえず、彼自身はアイロニーのつもりなのだが、読者によっては文字通り受け取ってしまいかねないような」議論が展開されていると述べている⁸⁾。このように、サザランドは、作者デフォーの制御が甘いために、語り手がその論理展開の中で、十分にアイロニーを利かせているとは

いえない箇所が散見されるという見方をとっている。しかしながら、デフォーは本作品の途中からアイロニーに拘ることを止め、自らの主張を読者に率直に語るという手法に切り替えたと考えるべきであろう（この問題については次稿で検討する）。

リシェッティの本作品に対する論評は、サザランドの解釈を引き継いだものになっていると言えるだろう。リシェッティの主張を纏めると以下の3点となる。まず第1に、バックシャイダーやノヴァクとは異なり、どの箇所でアイロニーが明確になるのかという問題をしっかりと論じている。上述したように、リシェッティは(d)の箇所でアイロニーが明確になっていると述べている（この第1の主張に関しては前稿で既に検討を行っている）。第2に、リシェッティは『王位継承に反対する理由』においては、アイロニーに揺らぎが生じていると指摘している。「ジャコバイト派の主張を徹底的に突き詰めることによって、彼らの主張に無理があることを示すという立場をとっているときさえも、デフォーはその主張をねばり強く展開しすぎる結果、ジャコバイト派の主張に力を与えず、一定程度の妥当性を付与してしまう傾向がある」とリシェッティは主張している⁹⁾。この主張は、サザランドの主張、つまり『王位継承に反対する理由』は全体としてアイロニカルな作品といえるが、読者が文字通り受け取ってしまう箇所、つまりアイロニーであることが伝わらない箇所があるとの指摘を踏襲したものと言えるだろう。

しかしながら、この第2の主張は適切とは言えないであろう。作品全体の論旨を丁寧に辿っていくと、本作品はアイロニーが不徹底なのではなく、デフォーは作品の途中から、アイロニーを用いることを止め、自らの持論を率直に読者に語るという方向に舵を切ったのだと考えるべきであろう。

第3に、他の先行研究がアイロニーの有無だけを問題にしているのに対し、リシェッティは本作品においてはアイロニーだけでなく、帰謬法 (reductio ad absurdum) も用いられていると指摘している（この問題については次稿で扱う）。

以上のように、リシェッティは、アイロニーが用いられている箇所の特定、アイロニーの揺らぎ、帰謬法の採用という3つの問題を扱っている。しかし、これら3つの問題を精査する前に、まずは語り手の特異性に着目すべきであろう。具体的には、アイロニック・ペルソナという特殊な語り手を、作者デフォーが用いていることについて、十分な分析を行うことが、上述の問題を検討していく前提になると考えられる。そのため、本稿では、先行研究において指摘されていない問題である、アイロニック・ペルソナの採用と、それがもたらす効果について論じていくこととする。

III

アイロニーを用いた作品においては、特殊な語り手が設定されることがある。ジョン・ベックは『文学の専門用語と批評』の中で、スウィフトが『ガリヴァー旅行記』や『控え目な提案』において「アイロニック・ペルソナ」を用いていると述べている。

As in *Gulliver's Travels* (1726) and *A Modest Proposal* (1729) ... Swift often uses an ironic persona, an invented narrator who is smug, self-confident or foolish. The irony is at the expense of the narrator, who is used to express all manner of foolish social ideas and prejudices. The touch of excess in the narrator's manner signals to us that his views are suspect: the detached author and reader both look down on his folly and that of the society he speaks for. Yet satiric writers such as Pope and Swift are not really detached, for they are disturbed by the fact that people can be so foolish.¹⁰⁾ (emphasis added)

アイロニック・ペルソナとは、作者が設定した「独りよがりであったり、自信過剰であったり、または愚かな」語り手のことである。作者は愚かな主張や偏

見に満ちた考えを大真面目に唱える語り手を意図的につくり出し、読者とともにアイロニック・ペルソナを批判的に眺めているのだ。その際、作者は読者がそのことに気づけるように、語り手の愚劣さが際立つような形でアイロニック・ペルソナを設定することになる。

そして、ベックは上述の引用の後半部で、諷刺作家が超然とした姿勢を一貫して保っているとは限らないと述べている。その理由として、ベックは「人々があまりに愚劣な存在となりうることに作者が当惑している」からだと説明している。ベックが取り上げたのは、作者と執筆対象との間に生じる心理的距離の問題であるが、愚劣なアイロニック・ペルソナと、そのペルソナを操る作者との間に生じる距離についても考える必要がある。本来は、アイロニック・ペルソナの背後にいて、語り手とは異なる見方をしている作者は、通常は語り手とは距離をとっているのだが、時には二人が重なり合うという例外的なケースが生じることがある。つまり、作者とアイロニック・ペルソナとの位置関係に揺らぎが生じることがあり、そのようなケースでは、作者が自らの考えを読者に伝えるための苦肉の策として、作者と正反対の主張を唱えさせているアイロニック・ペルソナに、作者の考えを一時的に代弁させることがある。『王位継承に反対する理由』においても、両者の位置関係に揺らぎが生じているケースがあり、この問題については第Ⅵ節で論じる。

ベックはアイロニック・ペルソナが採用された作品の実例として、長編小説『ガリヴァー旅行記』と、政治小冊子『控え目な提案』を取り上げている。以下では、『王位継承に反対する理由』と同じジャンルに属する『控え目な提案』をアイロニック・ペルソナの具体例として分析し、その分析を踏まえて、『王位継承に反対する理由』におけるアイロニック・ペルソナがもつ特徴について考えていきたい。

まず『控え目な提案』は、ダブリン市で物乞いをしている、子供を連れた女乞食の群れを描写することから始まる。そして、貧しい中で何とか子供たちが成長しても、彼らには仕事がなく、泥棒になるか、祖国アイルランドを出てい

くしかないという現状が説明される。次に、語り手は、この子供たちを活用する方策を提案したいと続ける。そして、アイルランドの総人口、出産が可能な夫婦の数、幼児を扶養できる夫婦の数、扶養不可能な幼児の総数などが、まるで人口問題を論ずるかのように挙げられた後、語り手が望ましいと考える具体的提案が紹介される。読み手に信頼感を抱かせる、理路整然とした語り口で始まった、『控え目な提案』は、ここから一転して、子供を食用にするという正気を疑わせる提案へと移ってゆく。

以下の引用は、本作品の中で最もよく知られた箇所である。

I have been assured by a very knowing American of my acquaintance in London, that a young healthy child well nursed is at a year old a most delicious, nourishing, and wholesome food, whether stewed, roasted, baked, or boiled; and I make no doubt that it will equally serve in a fricassee or a ragout. (emphasis added)¹¹⁾

シチュー、ロースト、焼き料理、ポイル、どの調理法であれ、「きちんと育てられた健康な子供は、一歳の頃が最も美味しく、栄養たっぷり、健康によい食べ物」となるという話を、物知りのアメリカ人から聞かされた時、語り手は述べ、また、工夫を凝らして「ラギー」や「フリカッセ」にしても、美味しく食べられるのではないかと付け加えている。

理路整然とした語り口によって創り上げられていた、理知的な語り手というイメージは子供を食料にするという提案によって一気に崩れるとともに、具体的な調理法が次々と紹介されることで、語り手への信頼は完全に失われてしまう。このように、アイロニック・ペルソナとは、語り手の見解が全く突拍子もない愚劣なものであることを読者に伝えることで、語り手が述べる見解は、作者の見解とは全く異なることを読者に伝える技法である。『控え目な提案』を読み進めた読者は、子供を食料にして貧困問題を解決しようとする、語り手の

おぞましい提案が提示された箇所において、語り手は通常の語り手ではなく、作者が意図的に設定したアイロニック・ペルソナであることに気づくことになるのだ。

そして作者がアイロニック・ペルソナを用いて読者に伝えようとしているのは、この語り手が唱える荒唐無稽な提案では勿論ない。作者が本当に主張したいことは、『控え目な提案』の別の箇所に、イタリック体で半ページにわたって列挙されている。その箇所で語り手は次のように述べる。子供を用いるという、私が今提案している案以外の方法など私に提案しないでほしい、即ち、「不在地主には一ポンドにつき五シリング課税」、「衣服や家具の使用は国産品に限定」といった案は口にしないでほしい。というのも、このような方策は既に献策済みであるが、一度も採り上げられることはなかったのだからと語り手は皮肉を込めて説明する。そして、読者はアイルランドを救うための具体策が列挙された、この箇所こそ、アイロニック・ペルソナを通して、作者スウィフトが本当に主張したい提案であることに気づくことになるのだ¹²⁾。次節では、『王位継承に反対する理由』の論旨を辿りながら、本作品においても、アイロニック・ペルソナが設定されていることを明らかにしていく。

IV

第1冊子をもつ最大の特徴は語り手の特異性である。作者デフォーは本作品において、次のようなアイロニック・ペルソナを語り手として設定していると言えるだろう。

- ・冒頭から読者を議論に引き込むような軽妙洒脱さを発揮している
- ・しかし読者を揶揄する姿勢が目立ち、信頼感が醸成されることはない
- ・展開する議論が余りに荒唐無稽であり、その愚かさを読者が気づく
- ・そのため読者は語り手の提案を真面目に受け取ることはなく、読者は作者とともにアイロニック・ペルソナを批判的に眺めることになる

まずは『王位継承に反対する理由』の冒頭部分から見ていこう。本作品でデ

フォーが設定した語り手は、作品冒頭から4つの疑問文を読者に連続して投げ掛けている。1. 諸君らはそもそも「何を騒ぎ立てているのか?」、2. 騒ぎの内容は「次の王に誰になるのか」というものだが、「そもそも次の王位継承がいつ起きるのは誰にも分からないのではないのか?」、3. 今アン女王が英国を治めているのに、それに満足せず、次の王は誰になるのかと問うて「混乱と騒動」を引き起こすのは余りに「奇妙ではないのか?」、4. アン女王の今後の在位年数もわからないのに、一体どうして「このような大騒ぎ」をするのか? 語り手は以上のような問いを読者に投げ掛けている¹³⁾。

最近の大騒ぎには困ったものだという砕けた口調から、読者は語り手が人々に対して抱いている揶揄の念を感じ取るだろう。そして、国家の行く末を左右する重大事であるにもかかわらず、王位継承問題を粗略に扱う語り手に読者は軽薄さを感じざるを得ない。そして、国家の行く末を左右する重大事であるにもかかわらず、王位継承問題を粗略に扱う語り手に読者は軽薄さも感じ、反発の念を抱くであろう。このように、『王位継承に反対する理由』においては、アイロニック・ペルソナの典型例として取り上げた『控え目な提案』とは異なり、冒頭部分から、語り手に対する違和感を読者が抱き始めるという仕掛けが施されていると言えるであろう。

次に、語り手がハノーヴァー家の王位継承に反対であると述べる、(b)の箇所を取り上げる。この箇所で読者はハノーヴァー家の王位継承に反対する一番目の理由を聞くことになる。我々英国民がハノーヴァー家のジョージを支持する一派と、僭王ジェームズ支持派に二分している状態で、ハノーヴァー家のジョージを英国に迎えるならば、「我々も選帝侯ジョージも破滅することになるだろう」¹⁴⁾と語り手は述べる。さらに「選帝侯ジョージが英国入りする際に、彼に力を貸し、彼を守ることができないならば、ジョージを王位に就けるという試みは関係者全員の破滅をもたらすことになるだろう」¹⁵⁾と語り手は続ける。

この箇所に至って初めて、語り手の立場が或る程度は明確になる。作品タイ

トルに惹かれて本作品を手にとった読者は、アン女王の異母弟であるジェームズ（つまりフランスの後ろ盾を得ているカトリックの僭王）を支持する人物が、本作品の語り手であると考えらるだろう。しかし、この（b）の箇所では、選帝侯ジョージが英国入りするのは時期尚早であると語り手が述べることによって、読者は初めて、語り手が僭王ジェームズ支持派ではなく、ハノーヴァー公ジョージ支持派であることに気づくことになるのだ。選帝侯ジョージの王位継承に反対すると述べられた題名に興味をそそられて、本作品を手にとった読者は「題名と作品の中身が違う」と不満を抱き、語り手に不信の念を抱くことになるだろう。

V

ジェーン・グレイに関する史実を導入した（c）の箇所において、語り手への疑いはさらに募る。というのも、語り手は1713年という本作品の出版年における王位継承問題の先行事例として、プロテスタント側からすると大失敗とさえ言える、1553年に起きた王位継承を巡る大事件を取り上げるからである。（b）の箇所において、語り手がプロテスタント側であり、ハノーヴァー公ジョージの王位継承に賛成していることを確認している読者からすると、なぜ大失敗に終わった「名ばかりの女王」レディ・ジェーンの例をわざわざ取り上げるのだろうと不信を抱くのは当然であろう。

「ジェーン・グレイを王位につく摂政ノーサンバーランドの陰謀」¹⁶⁾によって、「9日しか王位に留まれなかった、名ばかりの女王」¹⁷⁾であるレディ・ジェーン・グレイ（即位はしたものの、クイーン・ジェーンとは呼ばれない）の事件を、1713年の王位継承問題との関係で取り上げるのは不適切極まりないのである。というのも、この事件を取り上げると、読者は当然のことながら、ともにプロテスタント側である、ハノーヴァー公ジョージと、王位継承に失敗し処刑されたレディ・グレイとを重ね合わせることになるからである。しかも、1553年の王位継承における混乱により、300人を超えるプロテスタント殉

教者という大惨事が起きていることを、語り手は読者に思い出させることになり、現在の王位継承においても選帝侯ジョージの英国入りは諦めるべきではないかという不安に駆られる読者が多数出てきても不思議ではない（『ブリタニカ百科事典』は「火刑に処せられた異端者はおよそ300人に及ぶ」¹⁸⁾と具体的な数字を挙げている）。

本作品の語り手によるジェーン・グレイ事件の導入は、選帝侯ジョージ支持派にとって非常に不利なものであり、1553年の事件を、現在の王位継承問題と絡めるのは、否定的な効果しか生み出さないのである。語り手は、ハノーヴァー公ジョージ支持派であるプロテスタント側への警告として、本事件を取り上げたのだと装っているものの、読者は（c）の箇所に入れられた、語り手の皮肉な意図や底意地の悪さを感じることになろう。

VI

一方で、デフォーが本作品の語り手に、自らの本心を語らせていると考えられる箇所を見出すこともできる。以下の箇所は、第Ⅲ節で言及した、作者が語り手から距離を取らず、本心を垣間見せている箇所であると言えるだろう。

What! would you bring over the Family of Hannover [sic] to have them Murthered [sic]? No, no, those that have a true Value for the House of Hannover, would by no Means desire them to come hither, or desire you to bring them on such Terms; first let the World see you are in a Condition to Support and Defend them, that the Pretender, and his Power and Alliances of any kind, shall not Disperse and Ruin him and you together; first unite and put yourselves into a Posture that you may defend the Succession, and then you may have it; but as it stands now, good Folks, consider with yourselves what Prince in Europe will venture among Us, and who that has any Respect or Value for the House of Hannover can desire them to

come hither. (emphasis added)¹⁹⁾

「何と！ハノーヴァー家の人々を英国に招き入れ、しかもその後には死なせてしまおうつもりなのか？」と語り手は大いに驚いて見せた後、ハノーヴァー選帝侯の真価を理解している人はそのようなことを望むわけがないと続ける。そして「まずは、英国民がハノーヴァー家を支持し守るという状況にあること」を広く知らせる必要があると語り手は述べ、僭主ジェームズ支持派が、ハノーヴァー家のジョージや、彼の支持者を分断したり、害したりすることがないようにすべきだと続ける。そして、語り手は本作品において初めて、彼の本心を垣間見せる。「まず第一に英国民が一つになり、プロテスタントによる王位継承を断固守るという基本姿勢を見せる必要があるのだ」と述べている箇所は、語り手の背後にいるデフォーの本心と言える。この箇所では作者は、アイロニック・ペルソナという仮面を外し、その本心を読者に明かしているのだ。第Ⅲ節におけるアイロニック・ペルソナの説明にあるように、このタイプの語り手を用いる際は、作者は自らの見解とは全く異なる見解を披露する、愚かな語り手を操りつつ、話を進めるのが普通なのだが、時折、作者と語り手との距離が縮まる場合もある。この箇所では、英国の行く末を強く懸念している作者デフォーは、一時的ではあれ、自らの持論をアイロニック・ペルソナに語らせていると言えるだろう。アン女王の王位継承という、英国の将来を左右する重要問題において、デフォーが最も主張したいことは、「英国民が団結し」、僭王ジェームズを断固として退け、プロテスタントであるハノーヴァー選帝侯ジョージがアン女王の跡を継ぐことなのである。

VII

絶対王政への忠誠を当然視する（d）の箇所では、語り手に対する不信任はさらに募り、本作品の語り手がアイロニック・ペルソナであることが益々明らかになる。以下に該当箇所を引用する。

Now the Protestant Religion, the whole Work of Reformation, the Safety of the Nation, both as to their Liberties and Religion, the keeping out French or Spanish Popery, the dying at a Stake, and the like, being always esteem'd Things of much less Value than the faithful adhering to the Divine Rule of keeping the Crown in the Right Line, let any true Protestant tell me, how can we pretend to be for the Hannover [sic] Succession? (emphasis added)²⁰⁾

アイロニック・ベルソナが用いられた『控え目な提案』においては、食糧問題の対処に子供を使うという余りにおぞましい方策を語り手が提示することにより、読者は語り手がアイロニック・ベルソナであることに気づくという仕掛けが施されている。そして、語り手を背後で動かしている作者が読者に最も伝えたいことは、実は上述のおぞましい方策ではなく、作中においてイタリック体で強調された箇所（「不在地主には一ポンドにつき五シリング課税」、「衣服や家具の使用は国産品に限定」といった具体策）であることを読者は理解することになる。

『王位継承に反対する理由』においても、上の引用箇所にあるように、血統による王位継承と比較すると価値が低すぎるために放棄すべきであると主張されている、下線部こそが、作者が最も重視している内容なのだと読者は気づく。具体的には、「プロテスタントとしての信仰」、名誉革命以降の「英国における改革の全成果」、自由と新教を支える「国家の安寧」、「フランスやスペインの教皇主義という脅威を英国から取り除くこと」が、英国国民が死守すべき重大事なのだと、作者デフォーは読者に伝えようとしているのである。

そして上の引用の後半部においては、表面的な言葉と実際に伝えたいこととの間に乖離が生じるというタイプである「言語上のアイロニー」も用いられている²¹⁾。上述した「プロテスタントとしての信仰」等の英国国民が死守すべきことや、英国国民に課される可能性がある「火刑による死」は、「血統による王権」

を真摯に守るより「ずっと価値の低いもの」であると語り手は述べているが、これは作者の本心ではない。さらに語り手は、こういう状況下で、選帝侯ジョージの王位継承に賛成するといった途方も無いことを、どうして敬虔なプロテスタントが口にするのかを教えてほしいと、何食わぬ顔で読者に語っているが、これらの主張は作者の言いたいことは全く逆なのだ。作者はアイロニック・ペルソナを用いることで、読者に作者の本心を皮肉たっぷりに伝えようとしているのである。

次稿においては、本作品における史実の用い方に着目するとともに、リシェッティが提示している3つの主張を中心に考察を続ける。

注

- 1) Daniel Defoe, *Constitutional Theory in The Works of Daniel Defoe*, ed. W. R. Owens and P. N. Furbank (Pickering & Chatto, 2000).
- 2) Paula Backscheider, *Daniel Defoe: His Life* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1989), 323.
- 3) *Ibid.*, 323.
- 4) Novak, *Daniel Defoe: Master of Fictions* (Oxford University, 2001) 422.
- 5) James Sutherland, *Daniel Defoe: A Critical Study* (Oxford University Press, 1971); John Richetti, *The Life of Daniel Defoe: A Critical Biography* (Blackwell, 2005).
- 6) Sutherland, *Daniel Defoe: A Critical Study*, 64; Richetti, *The Life of Daniel Defoe*, 136.
- 7) 拙稿「ジャンルを超えた共通性（4）—デフォー作品における政治・歴史・文学—」『関西大学文学論集』（関西大学、2022）、第71巻 第4号。
- 8) Sutherland, 64.
- 9) Richetti, 136.
- 10) John Peck, et al., *Literary Terms and Criticism* (Third edition; Palgrave, 2002), 148.
- 11) Jonathan Swift, *The Oxford Authors: Jonathan Swift* (The Oxford Authors Edition, 1984), 493-4.
- 12) *Ibid.*, 497-8.
- 13) Daniel Defoe, *Constitutional Theory in The Works of Daniel Defoe*, 167.
- 14) *Ibid.*, 168.
- 15) *Ibid.*, 169.
- 16) 『世界大百科事典』CD-ROM版「メアリー1世」の項。

- 17) 'Lady Jane Grey' in Encyclopedia Britannica 2012 Ultimate Edition.
- 18) 'Mary I' in Encyclopedia Britannica 2012 Ultimate Edition.
- 19) Daniel Defoe, *Constitutional theory* in *The Works of Daniel Defoe*, 171.
- 20) Ibid, 172.
- 21) Peck, *Literary Terms and Criticism*, 147.